

# 白金蔵

十月号



平成 26 年 10 月発行

第 44 号

## 白金葭定例句会案内 (\*は吟行句会)

月例句会報 (14／10／17 9名欠2名 無患子、体育の日)

\*十月三十一日(金) 10:00～17:00 本郷吟行句会 (別案内状)

(文京シビックセンター地下一階学習室)

十一月二十一日(金) 12:00～15:00 アビスター第五学習室

兼題：蒟蒻掘る、木の葉髪

十二月十九日(金) 12:00～15:00 ア第五学習室

兼題：神楽、都鳥

一月十六日(金) 12:00～15:00 ア第三学習室 兼題：新年一般

17:00～19:00 新年会(備前)

蒟蒻掘る、木の葉髪の参考句 (11月21日分)

蒟蒻掘る尻がのぞきて 吉野谷

橋本多佳子

天が下土と同色蒟蒻掘

"

蒟蒻を掘らなアラファト悼みつつ

石井光枝

木の葉髪賞状筒に巻いてをり

今岡直孝

文芸に一世をかけし木の葉髪

上林暁

日月の去り行く速さ木の葉髪

三原信子

木の葉髪一生を賭けしなにもなし

西島麦南

鬚未だ伸びる力あり木の葉髪

大友渓水

東京にのこる渡や赤蜻蛉

かまつかや出会い頭に「いやんばい」

無患子の皮の皺々手でなぞる

被らんか爺も剗くりぬき南瓜(バブキュー)

体育の日のパチンコ店に人並む

増田陽一

2

飯田孝三

無患子を拾ふ觀光ボランティア  
無患子を拾うて剥いてもあります

光  
みち

無患子の念珠に艶の千光寺  
母の忌を忘れてゐたり薄もみじ

松村幸一

鮓桶を軒端に干して秋日和  
胡麻叩く愚図の亀虫逃げもせで

体育の日朝の鐘鳴り花火鳴り

弾丸の如き無患子上田城

寒露の夜まこと月蝕現はれり

吉羽多美子

栗飯に一汁一菜奢りかな

無患子の実の落つ笑ひ羅漢かな

鰯雲無人のごとき町通る

体育の日や漱石を読みふける

洪柿の大樹のありて売家かな

倉田紀子

青木啓泰

かまつかや父母の遺影を向きあはす

体育の日どこへも行かず昏るるかな  
ハンカチに小貝を包む海に秋

浅野正美

無患子の皮こするほど白い泡

玉入れの赤と白舞ふ運動会

スタート待つ手足に力運動会

青空に五輪を描いた体育の日

無患子の内なる音やコトコトと

無患子のかたさいぶかり暴風圏  
羽根になる無患子もある臨済宗  
体育の日に食う紅白まんじゅう

捨て猫やおはぎのようにかたまつて

箱に入れ捨て猫姉妹舟だまり

酔芙蓉白から紅に移る刻とき

体育の日とは何じやと渋茶汲む

辿り往く道の広さよ月天心

無患子の実のつややかに朝日照る

天心に月懸りけり眼鏡措く

十月十日今年はつひに雨となる

むくろじは頂ふ葉のなき葉かな

これから朝のつとめは落葉たき

友の絵は紅葉杜の美術館

箱根の湯弟妹六人語り合ふ

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

5 秋暑しダリが時計を曲げてより  
4 鮨桶を軒端に干して秋日和  
4 噴水に芯といふものありて澄む

幸 みち 陽一

武者昭七

1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 3 3 3 4 4  
月蝕妖しわれら地球の影怪し  
無患子の実の落つ笑ひ羅漢かな  
羽根になる無患子もある臨濟宗  
見舞ふべき妻を置き来て花野かな  
鰯雲無人のごとき町通る  
読返す子規の日録体育日  
胡麻叩くぐずの龜虫逃げもせで  
胡麻叩く愚図の龜虫逃げもせで  
無患子の実のつややかに朝日照る  
酔芙蓉白から紅に移る刻とき  
無患子を拾ふ観光ボランティア  
無患子の琥珀に今日の日が透けて  
彈丸の如き無患子上田城  
スタート待つ手足に力運動会  
無患子の皮の皺々手でなぞる  
被らんか爺も剝ぐりぬき南瓜バブキン  
母の忌を忘れてゐたり薄もみじ  
これから朝のつとめは落葉たき  
栗飯に一汁一菜奢りかな  
無患子の内なる音やコトコトと  
寒露の夜まこと月蝕現はれり  
体育の日に食う紅白まんじゅう  
体育の日どこへも行かず昏るるかな

多美子 陽一  
多美子 啓泰 幸一  
多美子 陽一 みち 昭七  
正美 孝三 正美 みち 昭七  
正美 紀子 陽也 正美 みち 昭七  
多美子 陽也 正美 みち 昭七  
多美子 啓泰 みち 昭七  
多美子 陽也 正美 みち 昭七

体育の日朝の鐘鳴り花火鳴り  
むくろじは頂ふ葉のなき葉かな

無患子の皮こするほど白い泡

台風に傘変形す体育用

天心に用懸りけり眼鏡措く

がまつがや父母の遺勲を向きあはす  
玉へしの示田空群へ運動会

玉入れの赤白空舞ふ運動会

五万枚の赤と白舞ふ運動会

箱根の湯原妙六ノ詠い合ひ

体育の日東京五輪時代あり

「天然先輩」とて台風こ委せをり

「天然温泉」。『古風に至る』

かまつかや出会い頭に「ハヤンボハ

十月十日今年はつひに雨とな

ハンカチに小貝を包む海に秋

体育の日スマホを撫づるばかりにて

### 無患子の念珠に艶の千光寺

初あらし半僧坊をはためかす

友の絵は紅葉社の美術館

青空に五輪を描いた体育の日

無患子を鳴らしてわたる風となりぬ

無患子のかたさいぶかり暴風巻

啟泰	正美	陽也	陽	昭七	正美
幸一	高志	紀子	陽二	陽一	正美
高志	高志	紀子	陽	高志	陽也
陽也	陽也	紀子	二	昭七	正美
		紀子			

一句鑑賞

かまつかや出会ひ頭の一いやんばい「

孝

体育の日とは何じゃと渋茶汲む  
捨て猫やおはぎのようにつたまつて  
辿り往く道の広さよ月天心  
体育の日のパチンコ店に人並ぶ

孝三 昭七 啓泰 昭七

羽根になる無患子もある臨済宗  
いい天氣で」「いい陽氣で」「いやまあ上天氣」と翻訳すれば、村の道に行きあつた村人の挨拶「いやんばい」と判る。村人の安寧な生活がにじみ見えてくる。「かまつか」は雁来紅とも称する葉鷄頭の古名である。これも「いやんばい」に平仄が合つてゐるのであつた。

無患子の実が数多落ちて いる寺の裏庭を思つた。

啓泰

の無患子の中迫羽根の羽根になるのは良い方で、殆どは、地にそのまま朽ちたりするのだ。皮は昔石鹼の代用にされたようだが、今は物好きでがペットボトルに入れて振つてみて、ああ確かに、サボニンがあるなどかやつてみるといかないか。もつとも、あの固い実を炒つて食べると美味しいと言う人もある。下五の臨濟宗がこの句の贅だ。「作麼生そもざ」とか、「喝」でも代用できそうだが、イメージから作句される、そう、連句の付け句の手法で作句される啓泰さんから一度作句工房の手の内を聞きたいものです。本句会は自句自解を原則として求めないのである。

### 月蝕妖しわれら地球の影怪し

陽一

「寒露の夜まこと月蝕現はれり」のみちさんの句の通り十月八日の寒露の望の月の欠けが宵の内から始まつた。これは太陽・地球・月が並んだ満月の夜起る天文現象に過ぎない。私はジョイフルホンダの無料観月会に行って皆既食を見た。倍率の大きい望遠鏡では、クレータまで見えるが、全体の色合いなどは双眼鏡の方が分かりやすい。自前の双眼鏡で見た月は、真っ黒ではなく、赤銅色、いや、焼諸の黄色い色のようであり、クレータの所為か、模様があつて掲句のようになまめいて妖しい。われら地球の影が写っているのだと思えば、不気味に思えるくらい怪しいのであつた。妖しと怪しの使い分けて月蝕を滑

稽化したのである。

### 醉芙蓉白から紅に移る刻とき

昭七

醉芙蓉は八重咲きで白色から次第に紅色に変る芙蓉であり、特に豊艶である。沖縄などで見かけるハイビスカスに似ていて、ほんとに綺麗な花であるが、一日で萎む。俳句は眼前囁目瞬間を詠えという主宰も居られるが、これは色が移つた瞬間ではなく、朝から昼夜と時々刻々紅に移る一部始終を詠つたとは作者の弁。「移る刻」と自動詞の連体形になつてゐるのはその表現である。一日で色を変える醉芙蓉に流れる時間は、我々人間にも等しく流れているわけで、まさに不易流行である。

### 一句鑑賞

飯田孝三

### ふくれつつ濁流は押す野分晴

幸一

このところ、各地で台風・洪水の被害が頻発している。今し、溢れんばかりの濁流の勢いに瞠り、一転、台風一過の晴天に目を転じる。野分「晴」が、天地を丸抱えて大きな胸中を去来するのは、自然の威か人為の矮か、思いは複雑。」「つつ」と「は」の呼応が「押す」を促し、止め「晴」が印象深い。

### スタートを待つ手足に力運動会

正美

幼稚園児か小学低学年か、スタート前の緊張ぶりが見てどれ、微笑ましい。俳句は言わず見せる、「手足に力」

が手柄、緊張の固まりである。見つめる家族総出（失礼）の視線さえ感じられる。「待つ」の軽い音觸タツチが後半の緊縛感を高めているのも見逃せない。秋晴れの運動会である。

弾丸の如き無患子上田城

上田城の一廓で無患樹の実を拾う。真田と徳川の攻防

## 攻防 みち

平 26

一句鑑賞

武者昭七

それならではのときには、例えは椎の実、橡の実でも、「鮓桶を軒端に干して秋日和」も「秋日和」で決まる。

高志

## 高志 とさて 何んで 俊裔の

どの地も観光事業に熱心、ボランティア活動が盛ん。老人それとも、婦人か、城（上田城ならむ）内、あちこち説明し、一廓の高木を指して「あれが、ほら無患樹・・・」やおら歩を進めがてら、地に落ちる実を拾つ

正美

“てみせる。城は名だたる古城、ふつと、貫く棒の如きものを感じたのである。眼前直覧、無量不易を識る。「拾ふ」のは、文理、ボランティアだが、作者だつてもちろん手のことつていい。

秋暑しだりが時計を曲げてより

陽

昨今、世界中が唯ならぬ異様気象つづきだが、これはしたり、ダリがだらりと時計を曲げて見せたせいだとな。

が、これは  
いだとな。

むべ、以来万民、四季埒もなき不陽氣に苛まれる。各人須く奮励克己、艱難辛苦に耐えるべし。さはさりながら、いやはや秋なお暑し暑し。エスプリの利いた、ところはイベリア発、今様俳諧の妙である。止め「より」が臍、その軽みがことさら興を添える。（出句一覽掲載順）

高志  
無患子を捨てて剥いてもあます  
無患子の実を拾つて剥いたまではよかつたけれどさて  
これからどうしたものやらと思案顔の作者の顔が浮んで  
くる。「拾つて」「剥いて」まではわれら繩文人の後裔の  
習性として極めて順調な挙動だけどそれを一転「もて  
あます」としたところが落語の落ちに似てなんとも愉快。  
傑作。

## スタート待つ手足に力運動会

正美

お孫さんの運動会だろうか。スタート直前の構えだ。選手も観客も緊張の一瞬である。「力」というのは内に溜めに溜めたエネルギーが瞬時に爆発したときに初めて力になるという。爆発寸前のエネルギーが手足にみなぎっている。いつもの甘えん坊とは違う少年？がそこにある。

陽也

下巻 いのせの甘ひん場とく

十月十日今年はついに雨となる

陽也

だつた。今年もと期待したけれどどうどう雨になつてしまつた。「ついに」は十月十日「トオトオ」の洒落だらう。

### ハンカチに小貝を包む海に秋

紀子

句の背後に「桜貝の歌」や「浜辺の歌」やらの懐かしいうたのむれがちらちらと流れてくる。目の前の海はもう秋の色。「秋の海」ではなしに「海に秋」としたところに移ろい行く季節の感じがでた。

### 体育の日朝の鐘鳴り花火鳴り

みち

兼題の「体育の日」はわれら高齢者にはどうも苦手らしく「ど」へも行かず（紀子）とか「漱石を読みふける」（多美子）とか「濱茶汲む」（昭七）とか拗ねたような句が目立つたなかで、これはなんとも素直で健康で明るく元気な句。沸き立つ歓声や歌声が聞こえてくるのが気持ちよい。

多美子

### 栗飯に一汁一菜奢りかな

幸一

季節には季節の賄がある。それだけで十分。それに一汁一菜が加わるとなればこれは最高の奢りというものであろう。作者の美意識が滲む。

### 無患子を鳴らしてわたる風となりぬ

幸一

もちろん秋風である。それといわずにそれを感じさせるところがこの国の文芸のゆかしさであった。みごとにそれを踏まえてみせた。

## 一句鑑賞

増田陽一

### 見舞ふべき妻を置き来て花野かな

幸一

夫人が重症で入院されている。作者はもとよりお見舞いと介護は欠かされない方であるけれど、日々の疲れもあり、ふと気の向くままに遠出をしてしまつた。「妻を置き來」たことがずっと心にありながら、我知らず花野に出来しまつたのである。共に遊んだこともある花野の、今は天国的な空虚の中にひとり立ち尽くしている・・・。（僕も境涯として痛く身に沁みる句です。そして、もともと、『花野』とはそのようなものではなかつたか、と思ひ、感傷のみならぬ秀句と 思います）

### 胡麻叩く愚図の亀虫逃げもせで

みち

家庭菜園ではさぞ色々な思いがけない虫に出会つて、それも一興であろう。カメムシは自分の悪臭に自信があるので急いで逃げたりはしない。叩くほうも虫を叩き潰すつもりはなく、追放したいだけだから、「この愚図め」とか何とか言つてはいる、収穫期の一齣が面白い。

### 被らんか爺も剗りぬき南瓜

孝三

ルビによつて、これはハローウィーンの南瓜と思う。あの南瓜に目鼻を割り貫く形は様式が決まつてゐるようで、奇怪さと滑稽を兼ね備えている。由来は知らないけれどあの奇怪さには西洋の伝統的な悪魔や魔女伝説好み

が匂う。けれどいくら子供でもあれを頭から被ることはないだろう。仁和寺の法師の鼎かぶりではないけれど。面白いから爺さん被つてみませんか、と老人のなかの子供心を呼びます。この簡潔にまとめた表現が見事。

### 栗飯に一汁一菜奢りかな

「一汁一菜」はつましい食事のことであるが、戦争

中はこれでも贅沢だと、時の政府が「一汁または一菜」と強制したものである。そんな記憶もまだどこかにあって、季節の栗飯に一汁と一菜はまさに奢りそのもの。

### 鮓桶を軒端に干して秋日和

何とも爽やかな句である。わざわざ桶で作った鮓は秋日和のなかでさぞ美味しかったと思う。秋祭の鮓かもしれない。僕の連想は紀州の秋祭の鯿の馴れ鮓で、酢を使わず、桶に詰めて自然発酵させた味が懐かしい。鮓の残り香と乾いてゆく桶の木の香に秋が感じられて。

昭七

### ハガキ句四十三報 管見 初鶏の投遣りな声聞こえ来る

### ハガキ句四十三報 管見

飯田孝三

高志

特に鍛えて若ぶっている老人は別として、わだら老境の者には等しくうなづける句であろう。この日の少し前の十<sup>テン</sup>月十<sup>トオ</sup>日が「転倒防止の日」なのだそうで、僕は転ばないように用心しているけれど、余計なお世話だ、という元気な人も居るだろう。さて、「渋茶汲む」の心境には同感するけれど「何じや」と氣概を見せたついでには「昼の酒」なども面白いでしょうね。

### 体育の日とは何じやと渋茶汲む

特別に鍛えて若ぶっている老人は別として、わだら老境の者には等しくうなづける句であろう。この日の少し前の十<sup>テン</sup>月十<sup>トオ</sup>日が「転倒防止の日」なのだそうで、僕は転ばないように用心しているけれど、余計なお世話だ、

という元気な人も居るだろう。さて、「渋茶汲む」の心境には同感するけれど「何じや」と氣概を見せたついでには「昼の酒」なども面白いでしょうね。

多美子

みち

ハガキ句四十三報 (09/1/20)  
鐘の音の鐘の音に次ぐ去年今年  
初鶏の投遣りな声聞こえ来る  
ひしくいも見ている土手の初日の出  
平成も甘をすぎて丑で明く

迷走も可々大笑す年のアサ  
光あるところ恵方と思ひけり  
どの家もおなじ深さに雪つもる

福笑ひ曾孫三人したがえて  
礼者来るお多福風の子を連れて  
我がいろに染めゆく月日初曆  
風のやうでありし日遠し春著の子

孝二

高志

啓泰

圓子

奉宣

裕子

美清流

三穂

敏子

妙子

たか子

りに「ひきかえ、「聞こえ来る」と、作者、自若のさり気なさが面白い。その間合いがいい。二〇〇九年頭、渾身の第一鳴で、グロウバル・リセッショնも吹っ飛べば、もつけの幸いである。

### どの家もおなじ深さに雪つまる

ふところ深い、内観の句である。どの家にも、それぞれ人々の営みがある。いつの時代も。さて、眼目「同じ深さに」の藏するところは？作者無言。こころ憎くも、読み手、めいめいの想像力に任ねるのである。三次達治の二行詩「雪」よりも、簡にして要を尽すか。

### 礼者来るお多福風の子を連れて

敏子

子づれ年賀客である。いやはや、子どもがふつくら、福々“お多福”似！めでたし。不況の厄病神も退散まちがいなし。締め「て」の“はえつ”ぶりが弾んで、快。（そそつかしい向きは、「お多福風邪」と勘違いなきよう。）思いつきだが、即物で、お多福「面」もあるかな。ちよつときついかな。

### ひしくいも見ている土手の初日の出

啓泰

「ひしくい」は、鴻または菱食を当てる。別名、ヌマタロウ。おおがん。初日を拝む土手の人たちや沼の“ひしくい”たちの影があたりだ。勿論、土手に上がっている“ひしくい”的姿もある。「ひしくい」のかな書きと相まって、母音イをかさねる韻きがいい。今様かな書

きは、口語表現のゆえだろうか。慣用か。旧かなの方が、めでたさが募る気もしないではない。

思えば、昭和の廿年は、二六〇五年の歴史が潰えた日。

あれから六四年卒寿をこえられた作者は、平成の今をどう見られるのだろう。因みに、「廿」は、算木を縦に二本並べた形、「丑」は、「手」の字形の爪を立てる。（指の先に力を入れ、強くものを執る）形だそうである（白川静『字統』）。さて、「廿」の読みは、「はたち」「にじゅう」のどちら？後者の方が相応しいと思うのだが。

### 福笑ひ曾孫三人したがえて

三穂

はて、曾孫「三人」をどうとろう？「福笑い」、「したがえて」の含蓄も読み手次第ときた。「曾孫」は、「ひまご」ならぬ「そうそん」でいきたい。以下、サ行音四復と語呂もよく、「したがえて」の風格に適う。巧まぬ手練の一旬と拝す。以上脱稿後、妻が掲句を見て、めでたさの限り、目尻下がりつぱなしの笑顔が見える。成程、筆者の時代認識が混乱した。齡のせい？ならば、曾孫は「ひまご」。いやまして、「したがえて」の風格が見事。

### 我がいろに染めゆく月日初曆

妙子

作者の年輪が滲む、年頭、矜持の句。益々、前向きの存念がめでたい。

圓子

迷走も可々大笑す年のアサ

光あるところ恵方と思ひけり

いずれも、悠揚迫らぬお正月の句。めでたし。

風のやうでありし日遠し春著の子

追憶の句である。「風のやう」に納得。ただ、「くし」、

「くし」の過去形重複が気になる。(平成21・02・08)

お便り広場（到着順、敬称略）

奉宣 裕子

秋茄子きのふと違ふ皿に盛る  
花槿豆腐片手の立ち話

みち 多美子

稻刈り夜は祭の煮炊きかな  
宵闇を來し眩しさの机かな

紀一

片言の果てしなき子と竹の春  
宵の闇厩舎平らに馬眠る

正美 啓泰

宵闇や足の急かるる無縁坂

昭七

白粉花の群れて咲くなり人に触れ

陽也

以上ですが、鑑賞はうまく書けませんので失礼いたしました。また、参加できなかつた蓮見吟行の句、毎年の企画ながら、かくも新しい詠みができるとに感服いたしました。小生もがんばらねば。本郷台吟行、楽しみにしております。

(H26・9・28 興正拝)

白金葭九月号拝受致しました。お奥様を介護されて、すばらしく充実した作句をなさつていて心から敬意を表します。それにしても益々充実していきますね。先月会食した笹崎、武井の両名は楽器演奏に力を入れていることを聞きびっくりしましたそれにひきかえ私は反省しています。先月（九月）下旬は真喜志さん十月初旬は鈴木恒雄さん武部さんの絵を見に行きます。見てもわかりませんが。益々の御活躍を祈ります（三十一日は先約があり残念です）

(9.27 小山陽也)

10月吟行の案内と「白金葭」43号をお送り

いただき、ありがとうございました。皆様の秀句の数々、楽しく拝見いたしました。小生の好きな句をあげますと、手土産に羽二重団子竹の春  
宵闇のまな板に鳥賊置きにけり  
宵闇の糀殻焼く火燃えあがる

高志 孝三

陽一

高志

高志様 10月吟行の案内と「白金葭」43号をお送りました。又新鮮なおやさいありがとうございます。特にピーマンはね、新潟でさいばいされる「かぐら南ばん」に似ています。多分おかぐらだと思うの。獅子頭にいてるね。感想書きたかつたけど、頭が空っぽ！皆さんに私の句を批評していただき、幸せです。（10.1 倉田紀子 拝復玉誌「白金葭」43号を有難く拝受。二〇一四一九年号。あと五号で満四年ですね。凄いことと感じています。「宵闇や発車のベルのけたたまし」（みち）「わざと遅らす時計の針を、やがて別れは来るものを。」という趣旨

の歌謡曲の一節のあつたような記憶と若い男女のデイトの別れの宵闇の情景を想像します。老人の不健康な妄想でしようか。「竹山に代々住んで竹の春」(高志)福山(広島県)の田舎の古い寺院や民家の竹藪のことを思い出します。

戸手高校の英語担当の名物教師の滝野孝三先生の竹藪の中の御宅を想い出します。(福山市駅家町の近田のバス停すぐ南)竹藪に柿の木の古木に赤い柿の実と麦藁葺きの古い民家を連想して、向井潤吉(一九〇一—一九五、

九四歳没。京都出身)ののどかな作品と平和な田舎の風景を想い出します。感謝して一筆まで。皆様のご健筆を中心から祈念申しあげます。(H 26・二〇・一四・9・28(日)pm 05—05はれ 河村博旨)

光成高志様

(H 26・10・14)

青木啓泰

て匂いと煙と暖を少々楽しんでいます。若しかしてこの匂い、病気退治の源ではないか。物理ノーベル賞を知りてふと思いました。

光成高志様

(H 26・10・14)

青木啓泰

茶碗蒸して召されと銀杏を

こがねなす胡麻をたつ。ぶり御強おこわ頬張る

(小生 赤飯は胡麻をいっぱいかけて食べるのが好きです。)

冬も間近く、ご夫妻のご自愛ご健吟を祈りあげます。お礼まで。

(平 26・10・19 飯田孝二)

43号所載の高野ムツオ氏の玉稿楽しく拝読しました。

銳利詳細な分析感じ入りました。これからもより多くの

方たちの鑑賞に触れさせて頂ければうれしく思います。

(10・20 武者昭七)

昨日は珍しく知人の個展が重なっていたので、銀座の画廊を5軒廻り、あちこちで「お元気ですね」などといわれる始末。原稿遅くなりましたが、間に合いましたよろしく。

(平・26・10・22 増田陽一)

受贈誌(十月号)

三間と離れず路地の石叩(彩 119号)

胡桃割る脳内革命起らむか(リ)

平野ひろし

一ヶ月は早いものですね。先日迄けやきの青葉が青々としていたものが、このところ色付いてホロホロと散つてきました。その落葉を毎日焚火している所に立ちあつ

(河村博旨さん、まだまだこれからですよ。本誌に投句頂いている俳人の方々は貴殿より年長の方です。幸一さんは御元気で卒寿になられました。大いに想像力を鍛えて楽しく生きていきませう。)

黴臭し紺屋の甕のがらんどう（〃）

景山公子

岩魚鮎秩父の札所めぐり食ぶ（飛行雲 72号）

駿河岳水

秋葉原ぞろぞろ白衣アラブ人（〃）

〃

灯台の跡にもの干す灸花（あすか十月号）

山尾かづひろ

原爆忌風が出ている空の色（亞 315号）

青木啓泰

捨て子猫鳴き鳴き死んで逝きにけり（〃 316号）

〃

うすぐやほのと漂ふ海ほたる（萱 210号）

木村嘉男

### 「だま（彩主宰 平野ひろし抽出）

点々と白浮き立たせ半夏生（白金葭 41月号）

光成高志

蓮見舟天気晴朗なれど波高し（〃 42号）

〃

### 俳窓評論纂

\* 青江由紀夫さんから「楔」31号が送られてきた。氏の同人誌四つの内のひとつ。特集「出会い」に六人の思い出が載っている。中に武田修一氏の「邂逅こそ人生の重大事」には、亀井勝一郎氏の講演を大学二年の教養講座で聴いて大変感動したことが書かれてある。そこには私が昨年孝三さん一家と邂逅して、引用した文章が載っている。皆この行には沈思默考するらしい。又、二宮金次郎の銅像は、どんな状況でも一步を踏み出すことを忘れてはいけないというメッセージを伝えてること、報徳がそのモチーフであるということを丁寧に書いておられる。親鸞の報恩と

同じと思った。青江由紀夫さんの「銀次郎の日記」は先の海峡派130号からの転載であって、これで二度読んだことになります。中に白金葭の紹介がしてあります。毎号会費は無料で云々とあるのは、違います。一部五百円です。そこでお知らせしておきます。巻末の総目録を見ると、氏は一九九三年（54歳）から投稿されて居られる文士であります。

\* 十月十一日土曜日江戸東京博物館にて同友の会セミナーワークshopの「川越と平林寺」に行ってきた。前日知り合った五十島いがしま静秋さんの紹介に寄つたものです。古文書解説の若いお茶の水女子大講師の方の90分の講演であった。知恵伊豆と呼ばれた老中松平信綱が作つた武藏野新田とサブテーマが付いていて、平林寺に引いた野火止用水の開削や新田開発など一般的な話をされた。氏は平林寺檀家総代を代々勤める家の何代目かの人である。漱石は参禅した経験を「門」に書いている。今月の啓泰さんの句に臨済宗がある。ここで又考えるに、禅宗の祖師達磨の目玉のような無患子の実であるなあという決めかも知れない。これを書いていて思いついたので書いた。

# 旅のうたを読む

## VIII 一万葉びとの旅

武者昭七

わが家いえるに行ゆかも人もが草枕くさまくし旅は苦しと告おほげ遣おとらまくも  
東国とうこくから防人ぼうじんとして召めしし出だされた若者わかわざのうたである。

四四六

。

世に東歌とうかといふ。我が家いえに行く人はいなかなあ。いる  
なら草を枕のこの旅はなんともつらいと家の者ふじやにつげて  
やりたい、といふのである。「家いえ」の「ろ」は東歌とうかに多い  
接尾語つけごでイへの訛り。  
一首のなかに「家」と「旅」とが  
ざやかに対照たいしょうされている。家は単に建物たてものを意味しない。  
ともに住む家族全体かぞくぜいたいをいうのである。そこは父母兄弟姉  
妹の息遣いの通う生活の場ばであり日常じつじょうであるのに対して  
旅はそこからひきはなされた非日常ひじつじょうの世界である。非日  
常とはいえ待ち受けているのは現代の観光旅行かんこうりょこうのごとき  
日常からの解放はきょうの喜びではなく、それ以上の不安と禁忌  
の生活であった。まして防人ぼうじんとしての務めを思えば不安  
は倍加ひへきしよう。せめてそんな思いを家の者ふじやに告げるてだ  
てがほしい、といふのである。ウチとは違つて草を枕に  
して伏す「タビは苦しい」の一語いつごが家鄉いえきょうの暮らしへの思  
いと重なつて切ない。

東路とうろの手児てこの呼坂よみがへ越こかねて山さんにか寝ねむも宿しゆくりはなしに  
村むらの境さへを越こえればそこは異鄉いきょうである以上に異界いきがいであつ  
つた。家族や恋人と離れての未知の世界。なんに出くわす  
か誰にも分からぬ。坂さかを越えるということは異界に身  
を投なげじることであつた。しかし家を離れた以上家に戻もどり  
もならず宿しゆくもないままに山に伏すほかにあるまいと作者  
は思うのである。山に寝、草に伏すことと旅とは同義語  
であつた。

君がゆく海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ 三五八〇

これは旅立ちを送る方の歌。男が新羅しんらに使つかわされるの  
を悲しんでの作。あなたが行く海辺の宿に霧がたつたな  
らそれはわたしの立ち嘆く息だと知つてほしい、といふ  
のである。万葉びとにとつて自然はひとの外にある現象  
ではなくおのれの心情の発現であった。船出ふなしりにとって霧  
の立ち込めることは不都合な現象ではあるが、離はなれが  
たく別れを惜しむもの同士にとつては好都合なことであ  
つたろう。できるなら霧よ晴れるな。切なげな息遣いが  
伝わる歌である。

(2014.03.16)

芭蕉の軽み以後(35)

光成高志

百里來たりほどは雲井の下涼み

桃青

自分は江戸を離れて百里もこうしてやつて來た。はる  
かに遠い旅を終えてこうして故郷の人たちと下涼みをし  
ているこんな楽しいことがあらうか、という句であらう。  
「百里來たり」と冒頭ぼうとうに打ちだして、「ほどは雲井の下涼

み」で切る。談林風というのは、伊勢物語のような古典を踏まえて、それを換骨奪胎して自分の気持ちを出してゆく。口調も滑らかである。

桑野という人の主催で、渡辺氏宅での歌仙の句が残つて いる。

詠ながむるや江戸には稀な山の月

桃青

山にかこまれたこの盆地はいかにももの静かである。

折りしも、月が山にのぼつたが、その月の趣も、家が立ち並ぶ江戸では見られないもので、つくづく、うちまちらずにはいられない。江戸に穢土を掛けて、山の月は、この穢土では稀に見る清らなですねと美しい故郷に贊辞をこめて挨拶しているのである。

故郷に置いてきたすてとの間に三人の子があて、身内の猶子桃印に長女のまさを娶らせていとこの桃燐との三人を伴つて江戸へ帰つた。延宝四年の夏のことであつた。ここは目黒野鳥編の「芭蕉翁編年誌」(昭和33年)に拠つた。この時芭蕉は日本橋小田原町の小澤太郎兵衛のもとにいた。桃印夫妻は同居し、桃燐は近くに間借りさせたのである。その年の暮れには

なりにけりなりにけりまで年の暮

桃青

という句が残されている。出来た出来たと俳諧を作つてき終りまでとうとう年の暮れになつてしまつたわい。謡曲の終りの常套句「なりにけりなりにけり」をはめ込

んで自分の一年の感慨を述べたもの。この句について季吟が判詞を下して「厄としや借錢そえてにしの海」という松村吟松の句と比較して「重詞新しく珍重に候なり、勝と為すべし」と言つてゐる。吟松の句に比べると、芭蕉の句には新しさがある。謡曲調を使つて歳末の感じを軽く言いなしてゐる。芭蕉の心境に何か明るいものが感じられる。年末になつたけれど、年があけても何とかなるだろうて、とか言つてゐるようだ。明けて延宝五年、

桃青三十四歳の歳旦吟は

門松やおもへば一夜三十年

桃青

というもので、一夜に千本生えたという北野天神さんの一夜松ではないが、門松を立て、一夜明けて三十歳となると、まるで一夜のうちに三十年が経つてしまつた思ひがするというのである。一夜松の古事を踏まえた門松の松と一夜を縁語仕立にし、一夜千本ならで、一夜三十と転回させた談林調の技巧の句である。論語でも三十而立、白楽天の三十は衰老に向うとある。

### 我孫子日記

- |            |                                    |                                  |
|------------|------------------------------------|----------------------------------|
| 9 / 19 例会。 | 9 / 24 S O A.                      | 9 / 25 *久寺家中。                    |
| 1 S O A.   | 10 / 3 * <sup>2</sup> 鎌倉。          | 10 / 8 S O A ↓ <sup>3</sup> J H. |
| ／ 9 久寺家中。  | 10 / 10 * <sup>4</sup> 萱吟行句会(阿佐ヶ谷) | 10 /                             |

10／11両国。 10／15 \*本郷。 10／17例会。

\*紫のトラック駐車栗の毬

人気なき裏の校庭栗実る

\*2 吾亦紅の供華に添へたり油点草(小林家の墓)

日輪を目玉としたり鰯雲

\*3 望の月皆既食にて赤くなる

寒露の夜まこと月蝕現はれり

\*4 無患子のサボニン出づる皮剥げば

御手洗の水のこぼるる秋の声

かみなづき豆大福の豆を噛み

色変へぬ松と新郎新婦かな

名物の商店街の大南瓜

\*5 色鳥や郵便バイク文人町

両側に木犀かほる坂の町

高志  
みち

虎童子  
たけ子

まい子  
まいち

高志  
みち

高志  
みち

高志  
みち

## 編集後記

本誌の項目を数えて見たら、この項も含めて16項あります。毎月様式は同じですが、内容が変わります。月々

の時の流れに沿うように俳句を作り選句選評をしておりまして、編集集は今更のように時の流れを体で感じられるようになりました。鑑賞は句会後一週間のうちに原稿を頂いて入力編集校正印刷製本発送作業を行つております。発送後ハガキやら手紙で感想などを送つて下さる方には、お便り広場に載せて返送しております。書簡も文芸の一 分野ですから。旅吟は無論、季語に関する新しい情報などをお知らせくださいされば、本誌で紹介致します。季語探訪の旅をも辞しません。

今日は私を除き三人の方の鑑賞文が届きました。お蔭様で休んでいたハガキ句報、芭蕉の軽み以後を載せて丁度十六頁になりました。どうか三人以上の鑑賞、感想なりをお寄せくださいるようここでお願いしておきます。

白金霞 第44号 平成26年10月発行  
編集・発行人 光成高志 (TEL & FAX 04-7187-1068)  
発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-1  
表紙の題字・加納綾女。写真は十月23日の白金霞